

住宅における建築と庭園

—— 庭園研究者・造園家 森蘊と建築家 堀口捨己・西澤文隆 ——

The architecture and garden in the houses

—— garden researcher and landscape architect Mori Osamu
and architect Horiguchi Sutemi and Nishizawa Fumitaka ——

田 中 榮 治

キーワード：建築、庭園、森蘊、堀口捨己、西澤文隆

要 旨

本稿では庭園研究者・造園家の森蘊に着目し、建築家の堀口捨己・西澤文隆との関係を探った。彼らの研究は建築と庭園を一体のものとしてとらえ、そのつながりを明らかにすることにより、日本の伝統的な建築と庭園の本質をつかみとり、新しい住宅における建築と庭園をつくり出すための創造的研究であった。昭和のはじめには建築家の庭園への関心は低かったのに対して、昭和10年頃からは庭園に強い関心を持つ建築家が現れ、庭園研究者と建築家との間に研究面での交流があり、お互いに評価し、影響を与えていたことがわかった。

1. はじめに

大正期にさかんとなる生活改良のための建築家による住宅改造において伝統的な日本の住宅が持っていた「自然との融和」の見直しが主張され、それに続く造園家による庭園改造において「戸外の室」として建築と一体的に利用する家族本位・実用本位の庭園の提案が行われた(田中 2012)。そのなかで、住宅における建築と庭園の連繋、建築家と造園家の連繋の重要性が議論されるようになった。前稿(田中 2014)において造園家西川友孝の編集により1936(昭和11)年に発行された『造庭建築』^{注1)}のなかの建築家および造園家の文章、さらにそれぞれの建築家あるいは造園家を書いたその他の文献をみることにより、住宅における建築と庭園の連繋については建築関係者と庭園関係者の意見は同様であったが、建築家と造園家の連繋については建築関係者と庭園関係者の意見に違いがあることがわかった。庭園関係者は建築家と造園家の提携、協力が必要であるとしていたのに対して、建築関係者は庭園関係者の知識を必要としつつ、建築家が自ら建築と一体的に庭園の設計も行うか、あるいは建築家の意向が充分に実現できるようにする必要があるとしていた。ただし、1933(昭和8)年に発行された日本建築学会パンフレットに掲載された古宇田實の文章^{注2)}からわかる通り、昭和のはじめには建築家の庭園への関心は低く、建築家が庭園に対して興味を持つべきであると指摘されていた。このこと

から、昭和初期の住宅の庭園について、建築家が主体となり建築と一体となって設計をするべきであるという建築関係者の主張は、庭園関係者による建築家と造園家の連繋の重要性についての主張や、住宅の設計にまで踏み込んだ造園家たちの著作^{注3)}などに影響されたものであり、造園家たちによる庭園改造の動きと関連しながら展開していったと考えられる。

本稿では、さらに昭和初期から戦後にかけての住宅における建築と庭園の連繋について考察するために、庭園研究者であり造園家でもあった森蘊（もり おさむ、1905～1988年）に着目し、特に日本の伝統的な建築と庭園の研究を行った建築家である堀口捨己および西澤文隆との関係を探ることとする。

2. 庭園研究者・造園家 森蘊

2-1. 森蘊

森蘊は1905（明治38）年8月8日に東京府立川村に生まれた。1932（昭和7）年3月に東京帝国大学農学部農学科を卒業し、同大学院に進学、1934（昭和9）年に修了した。この間、1933（昭和8）年5月に内務省衛生局事務取扱となり企画課に勤務し、1938（昭和13）年1月より厚生省体力局施設課事務取扱、同年3月には厚生技手となり体力局施設課に勤務し国立公園を担当した。1941（昭和16）年9月に東京市技手となり市民局公園課に勤務、1943（昭和18）年6月には東京市技師となり公園部技術課に勤務し、1944（昭和19）年1月に東京都井之頭恩賜公園自然文化園園長に就任した。1945（昭和20）年1月には海軍技師となり、ボルネオ民政部員として南ボルネオ地方の原始住居や農業園芸などの調査にあたった。1946（昭和21）年5月に復員、同年6月から東京都農事試験場に勤務した。1947（昭和22）年5月から東京植木株式会社に研究部長として勤めたのち、同年8月から国立博物館調査員となり、保存修理課で文化財保護に携わる。1949（昭和24）年6月に文部技官となり、1950（昭和25）年の文化財保護法成立により文化財保護委員会が設立され、修理課は同委員会の建造物課となった。1952（昭和27）年4月に奈良国立文化財研究所が新設されると、森は建造物研究室の初代室長に就任した。1954（昭和29）年12月に『桂離宮の研究』により東京工業大学から工学博士の学位を授与され、1960（昭和35）年5月に『中世庭園史の研究』により日本建築学会賞、1963（昭和38）年6月に奈良県文化賞を受賞している。1967（昭和42）年に奈良国立文化財研究所を退官したのちは京都市に庭園文化研究所を設立し、各地の歴史的庭園の発掘、復元を行うとともに、寺院や住宅などの庭園の設計も行なった。1970（昭和45）年3月に「桂離宮他日本庭園史に関する一連の研究」により日本造園学会賞、1974（昭和49）年11月に『庭ひとすじ』により毎日出版文化賞を受賞している。さらに、1975（昭和50）年11月に勲三等瑞宝章、1983（昭和58）年11月に和歌山市文化賞、1987（昭和62）年5月に日本造園学会上原敬二賞を受賞している。1988（昭和63）年12月14日に奈良県天理市で死去した。享年83歳。主な著書に『平安時代庭園の研究』（1945）、『日本の庭園』（1950）、『桂離宮』（1951）、『修学院離宮』（1955）、『中世庭

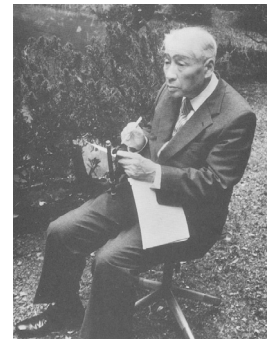


図1 森蘊
（森蘊門下生一同 1989 口絵）

園文化史（奈良国立文化財研究所学報第6冊）』（1959）、『日本の庭』（1960）、『寝殿造系庭園の立地的考察（奈良国立文化財研究所学報第13冊）』（1962）、『小堀遠州の作事（奈良国立文化財研究所学報第18冊）』（1966）、『奈良を測る』（1971）、『日本庭園史話』（1984）、『「作庭記」の世界』（1986）などがある。主な庭園設計に今西清兵衛邸露地（1953）、唐招提寺本坊客殿庭園（1956）、東大寺竜蔵院庭園（1957）、法華寺犬の庭（1958）、大神神社参集所内苑（1958）、加満田旅館庭園（1959）、唐招提寺御影堂庭園（1960）、大神神社宮司社宅庭園（1963）、松尾寺外園（1963）、檀原神宮文華殿庭園（1967）、慈光院新書院庭園（1967）、桜井寺庭園（1968）、矢田寺大門坊露地（1969）、郡山城跡市民文化会館庭園（1969）、和久伝旅館庭園（1969）、海眼寺庭園（1969）、九品寺庭園（1971）、講御堂寺庭園（1972）、延命寺庭園（1972）、粉河寺本坊庭園（1972）和歌山城二の丸庭園（1982）、薬師寺八幡院庭園（1985）、紫式部記念庭園（1986）など多数。

2-2. 建築と庭園の結びつきを求めて

森蘊は、日本建築学会の機関誌『建築雑誌』1983（昭和58）年9月号に「建築と庭園の結びつきを求めて」と題した文章^{注4）}を掲載しているように、生涯建築と庭園の連繫を求めて庭園研究と造園設計を行なった。森の建築と庭園の結びつきへの興味は学生時代につくり出されている。1929（昭和4）年4月に東京帝国大学農学部農学科に入学した森は、まもなく受講した田村剛の造園学に強くひかれた^{注5）}。田村の講義は毎年内容を変えていたため、森は3年間講義を聞き続け^{注6）}、それと同時に、田村に紹介状を書いてもらって京都府庁社寺兵事課や宮内省京都事務所にし向き、京都の社寺や桂離宮、修学院離宮、京都御所、仙洞御所、二条城などの庭園を見て回っている^{注7）}。また、大学卒業後は田村の勧めで1932（昭和7）年に大学院に進学し、その後田村が指導していた内務省に就職するなど、研究と仕事の両面にわたって森は田村の指導を受けている。この田村の影響が森を日本庭園研究に向かわせることになった。また、大学院に進学した頃から庭園の設計をして現場で指導をする一方で、庭師から実地の仕事についての教えを受けていた。

また、森は京都で御所や離宮、社寺の庭園を見て回るなかで、日本庭園を研究する上での建築の知識の必要性を感じ、まず近い親戚筋にあたる当時宮内省建築課長であった北村耕造に会いに行き、さらに北村が主催していた謡曲の会で顔見知りだった北村の東京大学での同期で東京工業大学教授の前田松韻の研究室に出入りするようになる。前田については、森の遠縁にあたる有職故実研究家で東京帝室博物館学芸委員の関保之助からも会ってみてはどうかとすすめられたとしている^{注8）}。当時、

前田は寝殿造系の住宅の姿を復元した論文を『建築雑誌』1927（昭和2）年1・2月号に掲載していた（図2）。前田は森に寝殿造系住宅における建築と庭園の研究は両方の専門家が手を取

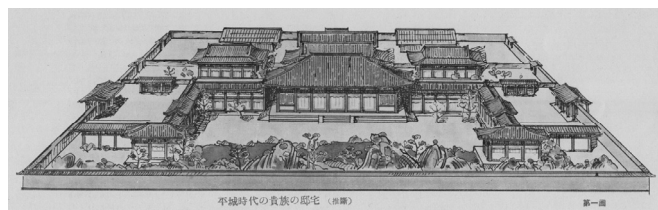


図2 平城時代の貴族の邸宅（推断）
（前田松韻 1927a p.24-25間の挿絵）

りあって進むべきであると説明した^{注9)}。これが後に森の寝殿造系庭園の研究につながっていくことになる。また、1932（昭和7）年には北村、前田の紹介で日本建築学会に入会し、戦前には「平等院庭園考」（1938）、「平安時代前期庭園に関する研究」（1939）、「平安鎌倉時代の造園技術」（1939）などの研究を学会誌に発表している。

さらに、森は田村を通して藤島亥治郎に許可をもらい、1931（昭和6）年4月から東京帝国大学工学部建築学科の聴講に通いはじめている^{注10)}。森は、伊東忠太の東洋建築史、関野貞の朝鮮建築史、塚本靖の日本工芸史、内田祥三の都市計画、岸田日出刀の建築意匠、藤島亥治郎の日本と西洋の建築史などを聴講した。特に藤島亥治郎の講義では、平泉毛越寺跡に伽藍配置を明確に示す礎石群とともに、その前面に当時の園池が現存することを聞き、その冬休みに現地を見てまわり、その後「平安鎌倉時代庭園遺跡の研究」を卒業論文のテーマに選び、また終生の課題とすることを決心している^{注11)}。また、1938（昭和13）年には関野貞の愛弟子であった足立康と大岡実が主催していた建築史研究会に大岡実と福山敏男の推薦で入会している^{注12)}。なお、東京帝国大学農学部林学科で田村剛の1年先輩の上原敬二は1919（大正8）年に造園学研究の必要上建築学科で伊東忠太、塚本靖、関野貞、内田祥三、佐野利器らの講義を聴講している^{注13)}。このことから、大正から昭和初期頃には庭園研究者が建築学科の講義を聴講することがあったことがわかる。

このように、森は学生の頃から庭園と建築の両方に興味を持ち、その後建築と庭園の結びつきを求めて庭園研究と造園設計を行なった。特に、古文書や絵図などの徹底した文献調査と、庭園や遺跡の実測・発掘・復元整備を通じた精密な現地調査から復元的考察という方法を確立していった。

3. 森蘊と建築家 堀口捨己

3-1. 堀口捨己

堀口捨己は1895（明治28）年1月6日に岐阜県本巣郡席田村に生まれた。1920（大正9）年7月に東京帝国大学工学部建築学科を卒業し、9月に同大学院に進学した。この卒業の年の2月に分離派建築会習作展覧会を開催し、7月には日本橋白木屋において第1回分離派建築会作品展覧会を開催した。1921（大正10）年3月に平和記念東京博覧会公営課技術員となり、1922（大正11）年に東京帝国大学工学部建築学科助手となる。1923（大正12）年7月から1924（大正13）年1月にかけてヨーロッパを巡り、特にオランダの新しい建築に関心を持った。ヨーロッパから帰国後、1926（大正15）年4月まで清水建設の前身である清水組に勤務し、同年5月より1927（昭和2）年5月まで第一銀行技師となる。この間から1928（昭和3）年9月までに7回の分離派建築会展覧会を開催している。1930（昭和5）年3月から武蔵野美術大学の前身である帝国美術学校の教授となり、1938（昭和13）年からはお茶の水女子大学の前身である東京女子高等師範学校の講師を兼務した。1941（昭和16）年に「利休の茶」

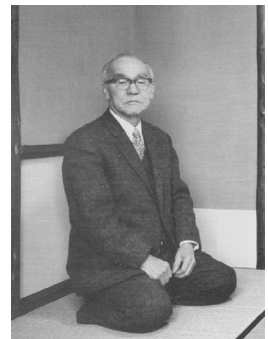


図3 堀口捨己
（稲垣他 1996 p.2）

により北村透谷賞を受賞し、1944（昭和19）年に『書院造りと数寄屋造りの研究 ―主として室町時代に於けるその発生と展開について』により工学博士の学位を授与されている。第二次世界大戦後、1946（昭和21）年に東京大学第一工学部講師となり、1949（昭和24）年2月から明治大学教授となる。1950（昭和25）年に『利休の茶室』により日本建築学会賞（論文賞）、1951（昭和26）年に八勝館八事店御幸の間により日本建築学会賞（作品賞）を受賞している。また、1953（昭和28）年には『桂離宮』により毎日出版文化賞、1957（昭和32）年には建築芸術に尽くした功績により日本芸術院賞を受賞している。この間、1953（昭和28）年から1955（昭和30）年まで東京大学大学院講師を勤めている。1965（昭和40）年には明治大学教授を退き、神奈川大学教授となり、明治大学では兼任講師となる。1966（昭和41）年に勲三等瑞宝章を受章し、1970（昭和45）年に日本建築学会大賞、および八勝館中店で第1回中部建築賞を受賞している。1984（昭和59）年に死去した。主な設計建物に、小出邸（1925）、紫烟荘（1926）、吉川邸（1930）、岡田邸（1933）、山川邸（1938）、大島測候所（1938）、八勝館八事店御幸の間・残月の間（1950）、サンパウロ日本館（1955）、料亭植むら（1955）、岩波邸（1957）、明治大学駿河台6号館・7号館（1958）、明治大学駿河台図書館（1959）、常滑市陶芸研究所（1961）、茶室礪居（1965）、大原山荘（1968）、有楽苑（1972）などがある。主な著書に、『現代オランダ建築』（1924）、『紫烟荘図集』（1927）、『一混凝土住宅図集』（1930）、『建築様式論叢』（共編、1932）、『茶道全集』（共編、1935-37）、『一住宅と其庭園』（1936）、『草庭 ―建物と茶の湯の研究』（1948）、『利休の茶室』（1949）、『利休の茶』（1951）、『桂離宮』（1952）、『庭と空間構成の伝統』（1965）、『茶室研究』（1969）、『堀口捨己作品・家と庭の空間構成』（1974）などがある。

特に、堀口は茶室建築・茶庭の研究から日本的なものに興味を持ち、自身の作品集を「家と庭の空間構成」と題するように、自然と庭園と建築が一体となった空間構成を追求した建築家である。

3-2. 日本庭園発達史

堀口捨己は森蘊より10歳年上であり、大学卒業は堀口が1920（大正9）年、森が1932（昭和7）年である。1938（昭和13）年に堀口が日本庭園協会の理事に就任した際、森は評議員のひとりであった^{注14}。堀口と森は1940（昭和15）年に発行された横井時冬『日本庭園発達史』の校註を一緒に担当している。『日本庭園発達史』は、1889（明治22）年に発行された横井の著書『園芸考』を創元社が日本文化名著選^{注15}のなかの1冊として改版したものである。上原敬二は横井の『園芸考』について、「ただ著述一冊であるが、初期の日本造園界に縁は深い。[…中略…] 参考とする専門書の殆どなかった昔のこと、筆者など唯一の読物として愛読した」（上原 1983 p.53）としている。また、森は『日本庭園史話』（1981）のなかで「私が田村剛先生の講義を聞いて間もなく、日本庭園史を卒業論文に選んでみたいと申し出た時、最初に聞かされた日本庭園史学の大先輩の名前は横井時冬



図4 日本庭園発達史
筆者撮影

『日本庭園史話』（1981）のなかで「私が田村剛先生の講義を聞いて間もなく、日本庭園史を卒業論文に選んでみたいと申し出た時、最初に聞かされた日本庭園史学の大先輩の名前は横井時冬

先生と、小沢圭次郎先生という方々であった」(森 1981 p.4) と記している。

『園芸考』から『日本庭園発達史』への改版にあたっては、まず「園芸」という言葉が庭園の意味以外に解されることがあるため題名の変更を行っている。また、『園芸考』が書かれた後の研究に関しては本文の註として補説し、新しく発見された「作庭記」および「山水並野形図」については本文を付載し、日本庭園についての基礎知識が得られるようにしている。さらに、原書の挿図は新たに写真に替え、また必要な写真を補っている^{注16)}。

『日本庭園発達史』が発行された1940(昭和15)年当時、堀口は45歳であり、住宅や大島測候所(1938)などの設計とともに「建築における日本的なもの」(1934)、「茶室の思想的背景とその構成」(1936)^{注17)}などの伝統的な茶室と茶庭の研究を通して建築と庭の空間構成の研究をはじめていた。一方、森は35歳であり、「平等院庭園考」(1938)、「平安時代前期庭園に関する研究」(1939)、「平安鎌倉時代の造園技術」(1939)などの庭園の研究を通して建築と庭園の結びつきの考察をはじめていた。

『日本庭園発達史』の編者註のなかで、『園芸考』が書かれた後の研究として各篇・節ごとに挙げられている文献は29編あり、特に室町時代までの文献についてみると19編中9編が森の著したものである^{注18)}。堀口と森が『日本庭園発達史』の編註をどのように分担していたかは不明であるが、室町時代までの編者註には森の文献が多く取り上げられており、また編者註のうち第二篇第二節までは森の文献について「拙稿」として記載されており、第四篇第一節の堀口の文献については「堀口捨己氏」と記載されていることから、編者註については森が主に担当していたと思われる。それにより、森は「堀口捨己博士と御一緒にその解説をさせられたので、よくこの本を読み、内容を詳かにすることができた」(森 1981 p.4) としている。

そして、『日本庭園発達史』のうちの「第五篇 維新以來作庭の變遷を叙す」のなかで、横井は明治維新後に日本風の家屋に西洋風の庭園をつくるような「庭園は家屋と關係を保つものなることを知らざるものあるに至れり」(横井 1940 p.159) という状況を問題とし、日本庭園を保存・研究することの意義を以下のように記している。

今日の状にては、家屋との關係をも論せず、漫りに西洋風の庭園を模するに至るは、嘆せずんあるへからざるなり、予は古建築物の保存せらるると共に、名苑を保存し、之を模本として益々園藝の美術を發達せしめんとするものなり

(横井 1940 p.159)

今後の庭園芸術を發展させるために古建築と合わせて日本庭園を保存し模範とするという考え方は、森の日本庭園史研究の考え方と一致するものである。森は『日本庭園史話』を以下のように結んでいる。

終わりにあたって本稿を次のように結びたい。／これまで問題にされなかった日本庭園の源流に少しでも近づけたことを喜ぶとともに、この庭園史研究で得た知

識と体験を生かして今後日本庭園の保存と復元整備に誤りのないように、作庭にあたっては、これがこの世の浄土ともいうべき日本の庭園芸術を築き上げ世界にひろめていく努力をつづきたい（森 1981 p.192）

堀口とともに校註を行なった『日本庭園発達史』のなかに、新しい庭園芸術の創作のための日本庭園の保存・復元整備という森の姿勢に対する影響をみることができる。

3-3. 洛中洛外屏風

森蘊は『日本庭園史話』のなかで「日本庭園史学をはじめた人たち」として東京大学農学部
の先輩にあたる外山英策、吉永義信とともに建築家・堀口捨己を挙げている^{注19)}。森は堀口を
著名な設計者であるとともに茶室建築研究はそれ以上に評価されているとし、また建築設計
の際には自分で庭園を設計し、現場指導すると紹介している。特に、堀口の日本庭園史研究の
特徴について以下のように書いている。

昭和40年には長年の研究をまとめた『庭、空間構成の伝統』という大部な本を完成された。この本は文献的な面でもみごとであるが庭園を美しく作るという抜群の鋭い意識が作用しているので、その資料の扱い方にどこから見ても素晴らしいものが感ぜられる。茶道家として、茶道研究家として早くから各界の尊敬を受けておられるだけあって、その交際範囲もひろく、戦前から、われわれの近寄り難い階層や、各方面の文化人との親交もあったので、そういうところに秘蔵された庭園資料も閲読しておられるし、自分でも、われわれの知らない秘伝書類を蒐集し、それを紹介してくださっている。そういう資料を駆使しての研究であるから、いつも私たちを驚かすようなものばかり書かれた（森 1981 p.8）

森は堀口の日本庭園史研究について、特に創作者としての視点を評価している。その上で、堀口がそれまでの日本庭園史研究では取り上げていなかったさまざまな資料を駆使しての研究を行なったことにより、森は堀口を「日本庭園史学をはじめた人たち」のひとりとして挙げていることがわかる。この点について、森は『庭ひとすじ』（1973）のなかで以下のように記している。

屏風絵とか衝立などに書かれた絵は、それほど写実的なものではないと思っていた私にとって、それらは庭園史研究の参考資料とはなりえても、復元的考察に役立つとは考えても見なかった。それなのに昭和十八年堀口捨己博士は、旧三条家、上杉家所蔵の二種の「洛中洛外屏風絵」から、応仁の乱などの戦禍からようやく復興した京都の公家や武家の住宅や町並みを復元し、内裏・足利將軍邸・細川管領邸の建物の輪郭や、池庭の形まで図示されるなど、建築史研究の資料としても

一流のものであることを立証された（森 1973 pp.121-122）

このなかの堀口による昭和18年の研究とは、『畫論』第十八號に発表された「洛中洛外屏風の建築的研究」（1943）であると考えられる。ここでは、洛中洛外屏風絵の中の建物が写實的に表現されていることを検討し、その中に描かれた建物の時代を考察したうえで、内裏・將軍邸・管領邸などを詳細にみることで、寢殿造から書院造への変遷を明らかにすることを試みている（図5）。それにより、堀口は洛中洛外屏風絵が絵画史の上だけではなく、建築史の立場からも見逃すことができない研究資料であることを立証した。その後、森はこの堀口の研究に刺激されて「洛中洛外屏風絵」の細川管領邸や二条押小路殿の復元的研究を行なっている^{注20)}。このように、堀口という建築家により行なわれた研究方法が、森という庭園研究者のその後の研究方法に影響を与えたことがわかる。その一方で、堀口は「洛中洛外屏風の建築的研究」のなかで、美術史の田中喜作氏の研究から教えを受けるとともに「太田博太郎氏、福山敏男氏、森蘊氏等からも資料の指示にあづかつてゐる。ここに誌して敬意と感謝を表はす」（堀口 1943 p.2）として森の研究から資料を得たとし、註の中で特に森の「泉殿釣殿の研究」^{注21)}を参考にしたと記している。これにより、森と堀口は日本庭園研究の上でお互いに影響しあっていたことがわかる。

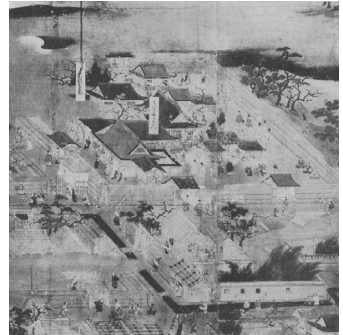


図5 三條家蔵洛中洛外屏風
（堀口 1943 p.40-41間の挿絵）

3-4. 家のはなし

森蘊は、1947（昭和22）年8月に国立博物館調査員、1949（昭和24）年6月から文部技官となり文化財保護に携わった関係で、『日本の住居のうつりかわり』（1949）、『衣食住の話』（1950）、『家のはなし』（1950）、『生活の歴史』（1951）など、戦後に子ども向けに日本の住宅を紹介する本を数冊書いている。

このなかの『日本の住居のうつりかわり』（図6）は、第二次世界大戦終戦後の日本人が文化国家を再建するためには、それまでの伝統的な住居をどう改良するのが大切な問題であるということ子どもたちに知ってもらうために書かれた本である。そのために、当時は建物の歴史を研究する際に社寺建築が主として取り上げられ、住宅はあまりかえりみられなかったのに対して、「この本では住居のうつりかわりのわからないところは、これからどうしてわからせたらよいだろうとか、その研究にはどんな方法が今まで試みられてきたかということを中心として書きました。そして今のところこのへんまでわかっているということをお目にかけたわけです」（森他 1949 p.4）というのがこの本の主旨である。そのなかで、1923（大正12）年の関東大震災の教訓



図6 『日本の住居のうつりかわり』
筆者撮影

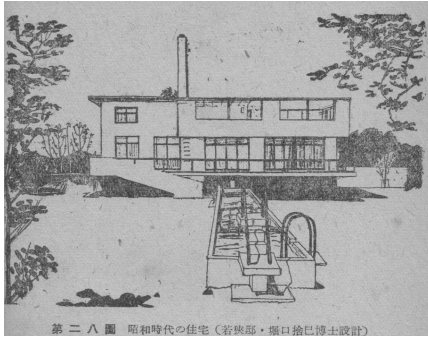


図7 若狭邸 堀口捨己設計
(森他 1949 p.64)



図8 『家のはなし』
筆者撮影

から、大都市の住宅建築として鉄筋コンクリート造が理想的であるという考え方が行なわれるようになり、同時にヨーロッパのモダニズム建築の影響を受けた住宅の事例として堀口捨己が設計した若狭邸が取り上げられている（図7）。



図9 吉川邸 堀口捨己設計
(森 1950a p.32-33間の挿絵)

また、『家のはなし』（図8）は、幼い頃から住居に対する正しい認識を与えることにより、子どもたちの住居に対する夢を良い方に伸ばし、将来子どもたちがより良い住居をつくり、日本らしい都市や農村の建設に役立つようにすることを目的として書かれた本である。この本の「三、すみよい暮らし」のなかで森は土浦亀城や坂倉準三の設計した住宅とともに、「せんそうまえの日本でも、こんなすばらしい家がありました」（森 1950a p.32-33間の挿絵）という文章を付して堀口が設計した吉川邸（1930）を紹介している（図9）。

さらに、森は上記の本と同じ時期の1950（昭和25）年10月に発行された『日本の庭園』の「第五節 現代の庭園」のなかで、関東大震災後に建築家のなかに都市住宅は鉄筋コンクリート造に限るという議論が出てきたとし、「一方欧州におこった国際建築運動の影響を受けた若い人達は日本の気候風土に合致した材料によつて機能第一主義をとるなど、庭園の機能を含めて大いに都市建築の新しい行き方を主張し実行にうつしはじめた」（森 1950b pp.49-50）とし、その事例として『日本の住居のうつりかわり』と同じく堀口の設計した若狭邸を挙げている。さらに、当時の状況を以下のように書いている。

昭和年間に入ってから、新しい住宅問題が起りはじめ、住宅合理化の運動及び国際建築の新しい運動の上に立脚した、新庭園運動が起りかけたのである。／今度

の戦争に突入する直前、昭和十五年ころより終戦までの都市生活者の庭園は、防空と生産の線に沿って、美観も保健もあらゆるものが犠牲にされて、文字通り庭園さえも戦時一色にぬりつぶされる姿であつた。[…中略…] 住居は新憲法 of 精神に沿って生れた新しい家族制度のもとにあらねばならない。庭園も又民主化された住生活を反映したものでなければならない。二重生活が清算された暁の住生活が洋式化し、庭園もまた疊座敷から坐つて眺める態のものから、居室の延長として家族本位に利用される戸外室たるにふさわしいものとならねばならない。その場合テレース又は芝生は缺くべからざるものとならう。

(森 1950b pp.50-52)

ここでは、昭和初期にはモダニズム建築の影響を受けつつ住宅を合理化するという動きが生じ、それに伴って新しい庭園運動が起こりかけたものの、戦時色が濃くなることでそれらが中断せざるを得なかったという状況にあり、さらに森は戦後の新しい住宅の庭園としては居室の延長として家族本位に利用される「戸外室」としてふさわしいものでなければならないと考えていたことがわかる。その上で、森は戦前の日本の住宅の好例として堀口の設計した住宅を評価していたのである。

3-5. 美しい庭園

森蘊は、『日本の庭園』と同じ1950(昭和25)年10月に発行された『美しい庭園 —鑑賞と造庭—』(図10)のはじめの言葉において、従来の日本庭園についての解説書が庭園史として編纂されたものや京都名園案内記といった形式のものが多かったのに対して、「この新しい時代の要求に應じて過去に於ける日本庭園の眞價を國民に認識してもらい、又世界の観光客にも理解してもらおうとするためには、もつと便利な庭園鑑賞の手引きが必要だと考える」(森 1950c p.1)として、この本が専門家に向けたものではなく一般の人を対象としていると述べている。また単なる知識を得るだけではなく、庭園を日常生活の場としてとらえ、その環境整備とともに健康的な住生活を送るための実用的な面から考察したものであるとしている。さらに、それに続けて庭園と建築の関係について以下のように書いている。

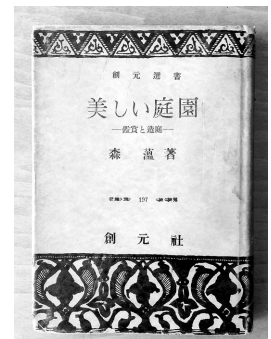


図10 『美しい庭園 —鑑賞と造庭—』
筆者撮影

それと同時に庭園は建築と密接不可分の関係にあるものであつて、これまでの建築と切はなして説かれて来た庭園書には、いささか物足りなく思われる点があるので、住生活の面との接しよくという点を考え、建築と共に利用し、建築と併せて鑑賞するという態度を出来るだけ取入れて見たのである (森 1950c p.1-2)

ここに森の建築と庭園の結びつきを求めるという意識をみることができる。これは、大正から昭和初期における生活改良のための住宅改造、さらには庭園改造を議論するなかで、日本の伝統的な住宅が持つ「自然との融和」という特徴を見直し、新しい時代の日本の住宅とその庭園をつくり出すという考え^{注22)}をより具体的に考察しようという試みであると考えられる。さらに、昭和初期に造園関係者や建築関係者から提起のあった住宅における建築と庭園の連繫を求めるという動き^{注23)}からつながるものであるととらえることができる。そして、森は「八日本庭園と住宅建築との関係」のなかで、庭園を実用の面からみると以下のふたつに大別することができるとしている。

その一つは住生活即ち建築との関係から、住居の内部に於けると同様に、戸外に於ける住生活の場所即ち戸外室として見た場合であり、他の一つは生産又は演技行事などの面から見た場合である。[…中略…]庭園は住生活の場所として、戸外室とも呼ばれるに相應しく、休養、運動、鑑賞などの精神的、肉体的の厚生を行う場所として、明瞭な目的のもとに独立した地域を区劃されたものでなければならぬ(森 1950c p.136)

その上で、森は古代から現代まで日本庭園と住宅建築との関係を考察している。森は、住居が自然にとけ込んでいて庭園的な設備の必要が認められなかった古代から、日本では住居のまわりには果樹を植えたり、ベランダ状の戸外室的なものなどがみられたり、花見や舞楽などの行事が行われるなど、実用的な使い方がされており、住居との関連性が次第に密になっていったとしている。さらに、飛鳥奈良時代の庭園と住宅建築から、平安時代の寝殿造の庭園、室町時代以降の書院造の庭園、安土桃山時代以降の数寄屋造の庭園まで、伝統的な日本庭園と住宅建築の関係について考察しているが、そのなかで堀口捨己の研究を参考にしている箇所がいくつかみられる。

たとえば、書院造の庭園については、本稿で先に取り上げた堀口の洛中洛外図屏風絵研究から足利義政の建てた東山殿や管領細川高國の住居とその庭園の関係が明らかになったとしている^{注24)}。また、数寄屋造の庭園について、森は堀口の茶庭と茶室建築の研究を取り上げ、利休の頃に書院造庭園と異なった実用に重きを置いた茶庭の体系が組み立てられていったものと考えている^{注25)}。さらに、「九 日本庭園の作者」のなかで利休の造庭について堀口の著書『利休の茶室』を取り上げ^{注26)}、また「一〇 日本の庭園書と庭園図」のなかで堀口の所蔵している『釣雪堂庭図巻』について言及する^{注27)}など、森は堀口の研究を参考にしながら、日本の伝統的な庭園と建築の関係に「実用的な面」での関連があることを明らかにしようとしている。

ここでは、大正期から昭和初期の庭園改造の議論が伝統的な日本庭園を「鑑賞本位」とし、新しい時代の新しい庭園は「実用本位」であるべきだとしていたのに対して、森は伝統的な日本庭園のなかにも実用性を重視し、庭園と建築の密な関係が実現していたと考えている点が相違していることがわかる。これは、堀口が茶庭と茶室建築を研究するなかで、茶の湯を日常生

活の形式を借りて美を求める芸術であるとして「生活構成の芸術」と呼び、庭園・建築及び器具などと、さらに人までを含めた構成の仕方を考察することにより^{注28)}、そこに庭園と建築が一体となった空間構成としての「合目的の美」を見出し、のちに自身の作品集のタイトルを「家と庭の空間構成」^{注29)}とした堀口の考え方が、森の伝統的な日本庭園のとらえ方に影響を及ぼしていたと考えられる。

森は堀口の庭園研究を取り上げる一方で、『美しい庭園 ―鑑賞と造庭―』のなかで堀口の設計した住宅や庭園についても触れている。まず、「八 日本庭園と住宅建築との関係」「8 現代住宅と庭園」において、先に紹介した『日本の住居のうつりかわり』と同様に、1923（大正12）年の関東大震災により耐震耐火建築として鉄筋コンクリート造を採用する気運が高まり、同時にヨーロッパにおける国際建築の主張が日本に紹介されると、これに刺激された日本の若い建築家たちが、鉄筋コンクリート造をいかにして日本の気候に合わせることができ、新しい材料と従来の材料とをいかに組み合わせて日本の風土に完全に調和融合させるような住宅を得ることができるかなどを真剣に研究しはじめたとしている。そして、近代住宅とその庭園について以下のように書いている。

こうして日本の近代住宅建築は個人住宅の方面にも集合住宅の分野にも見るべき
発足を促したのだつた。こうした新しい傾向の住宅建築に伴う庭園は、所謂機能
本位のもので、所謂住宅建築の延長として、戸外室として取扱われたものである
（森 1950c p.163）

ここで、森は新しい傾向の住宅建築とそれに伴う庭園の事例として、堀口の設計による吉川邸と岡田邸を取り上げている（図11、12）。特に岡田邸の写真には「近代住宅の実用の中に生きている日本古来の庭園意匠」（森 1950c p.162）という解説が書いてあり、森が伝統的な日本庭園の「実用性」に着目し、その意匠を近代住宅の庭園に取入れることを考えていたことがわかる。また、「九 日本庭園の作者」「5 近代の造園家」の最後の部分で、以下のように書いてい



図11 吉川邸 堀口捨己設計
（森 1950c p.161）



図12 岡田邸 堀口捨己設計
（森 1950c p.162）

る。

猶大正昭和の造庭界に作品を残し活躍した人達は、多く現在猶健在であるが、近年に至つて農林関係の造庭家よりも建築家出身の技術者の方の進出が目覚しい
(森 1950c p.179)

ここでも、建築家出身の造園家の代表的作品として堀口の設計による山川邸を取り上げている(図13、14)。ここで「近代住宅の庭園のそこここに日本古来の庭園意匠が巧妙に取入れられている」(森 1950c p.178)としている点は、先に挙げた岡田邸と同様である。また、森は『日本の庭』(1960)のなかでは具体的な建築家の名前を挙げている。

昭和十年頃から後、殊に終戦後の庭園界の特色として、農林関係の出身者よりは建築家出身の設計家の進出が目立っている。著者の寡聞にもよろうが、堀口捨己博士・谷口吉郎博士・吉田五十八博士・坂倉準三氏などの作品は、建築と同様に高い評価を得ているし、もつと元気のいい所では、丹下健三氏や清家清氏の建築が定評あると同時に、その餘技とも思える庭園設計の巧妙さに、思わず庭園専門家達も反省させられるものがある

(森 1960 p.129)

さらに、『美しい庭園 ―鑑賞と造庭―』の「一二 これからの日本庭園」「2 これからの住居と庭園」において森は以下のように書いている。

住宅建築は、住生活に関係して來ることであり、庭園は家庭に於ける戸外生活又は、防衛、外観、保健、防火其他色々の目的に関係して來るので簡単に庭園学者が、実用と美観との両立といった二次の方程式を解いて見せたところで、それは何の役にも立たない(森 1950c p.221)

ここでは、大正期から昭和初期における庭園の「観賞本位」から「実用本位」へという単純な議論を否定し、これからの住居とそれに附随する庭園は住生活上の様々な目的を合わせて検討する必要があるとしている。そして、「これからの住宅建築としては、もはや昔流行したよう



第四四図 西宮市山川氏住宅
建築家出身の造園家(堀口捨己博士)
の代表的作品

図13 山川邸 堀口捨己設計
(森 1950c p.178)



第四五図 同上
近代住宅の庭園のそこここに日本古
来の庭園意匠が巧妙に取り入れられ
ている(堀口捨己博士作品)

図14 山川邸 堀口捨己設計
(森 1950c p.178)

な書院造や数寄屋造にかえりそうにもなく、庭園は又築山林泉風乃至は石や砂の平庭といったものにはなり得ない事だけは確かである」(森 1950c p.221)とし、新しい時代の住居や庭園としては過去の形式を否定した上で、森は住宅の外構としての門や玄関前庭、垣や塀等、あるいは小面積の庭園の処理について、「やはり纏め方は過去に於ける日本庭園の傑作を参考にして行く事は利巧である」(森 1950c p.225)として、その実例として谷口吉郎や堀口の設計した住宅の外構や庭を紹介している(図15、16)。さらに、森は「これからの生活としては、旧来日本庭園の存続意義を認めにくいのであるが、過去の名園のいくつかは、これからの庭園の纏め方の参考として、他の純粹美術品と同様、文化財的価値に於て保存すべきものであると考える」(森 1950c p.225)とし、新しい住宅の庭園を考える時に過去の日本庭園の優れた点を参考にする事が有効であると考え、そのためには優れた庭園を保存する必要があると主張している。

日本の庭園は今日の私達の住生活から見ると遠くかけはなれた世界でしかない。そこではこれからの健やかに明るい平等な庭園生活を楽しむことは困難と思われる。しかし一度それを純粹美術に近い先達の遺品として観察する時、作品に含まれた祖先の素晴らしい制作意慾に圧倒されるようなものが決して少くない



図15 K氏住宅 谷口吉郎設計
(森 1950c p.223)



図16 荒尾氏住宅 堀口捨己設計
(森 1950c p.224)

(森 1950c p.226)

このなかの「純粹美術に近い先達の遺品として観察する」という考え方は、堀口の「家と庭の空間構成」にみられる住宅を建築と庭園が一体となった空間構成としてとらえる考え方と共通するものがあると考えられる。『美しい庭園 ―鑑賞と造庭―』において、森は堀口の研究と設計の両面を評価し、そこから影響を受けて自身の考えを深めていったことがわかる。

3-6. 創作としての研究

森蘊と堀口捨己の研究は桂離宮へ向かっていく。森は昭和初期の平安時代庭園の研究を経て、1951(昭和26)年に創元社より『桂離宮』を出版し、1954(昭和29)年12月に『桂離宮の研究』により東京工業大学から工学博士の学位を授与されている。堀口は大正期の茶室・茶庭研究からはじまって、書院造と数寄屋造の研究を経て、1952(昭和27)年に毎日新聞社より『桂離宮』を出版し、1953(昭和28)年にはこれにより毎日出版文化賞を受賞している。

森の庭園研究は「復原的考察」^{注30)}として、精密な実測による現地調査と地形学の基本的法則による地形変化の推測、さらに庭園創始頃に書かれた指図や絵図が残っている場合は現在の地貌と見比べることにより、もとの地形などがある程度復原しながら、その作意を考察することを研究の方法としている。さらに建築史の知識を応用することにより、主要建築の配置や構造の変遷を知ることができれば、「建築を中心とした創始期の庭園の利用状況も明瞭になって来る。当初の建築との相互関係、建築と共にあると私が常に論述している庭園の実用面もはつきりとして来るのである」(森 1960 p.4)とし、最終的には建築と庭園の結びつき、そして建築と一体となった庭園の実用面を明らかにすることを目標としている。

桂離宮についても森は徹底した資料収集と精密な現地調査から数多くの考察を行なっている。その上で、森は桂離宮の建築と庭園について以下のように書いている。

建築家は庭園景観を破壊することをおそれ、造庭家は建築的意匠に混乱を生ずることをはばかつて、これまたつとめて互に謙虚な態度であつたと考えるのである。かくて今日に至り不自然な感じを抱かしめないばかりでなく、建築と庭園とは相寄り相援けて、完全な調和となり、又年代による意匠の対立は、むしろこころよい變化をあたえて、一種獨特な桂離宮の持味とさえなっていることは、實に奇蹟といわなければならない(森 1956 p.315)

森は庭園研究者として文献と現地の緻密な調査を通して、桂離宮の建築と庭園、そして建築家と造園家の優れた連繫を見出している。

一方、堀口の『桂離宮』は、「先には横井時冬氏、小澤圭次郎氏、川上邦基氏、近くは外山英策氏、澤島英太郎氏、森蘊氏、藤島亥治郎博士など」(堀口 1952 はしがき)によるそれまでの多くの研究に負うところは少なくないとしつつも、「然し思ひつき到つた所は、全く離れた所にあつた」(堀口 1952 はしがき)としている。

いまの桂離宮の建物や庭については、その美しさを如何に見る可きかと云ふ事に於て、既に私は幾とせかの心を養つてゐる。それを示すものは、ここでは、カメラを通して語つてゐる所のものに外ならない(堀口 1952 はしがき)

堀口は「建物や庭を自ら作つて見て、それを寫眞にした場合、如何にその作品としての價值が、いつはる事もなく示されるかを、私は日頃身にしみて知つてゐる」(堀口 1952 はしがき)とし、建築家として写真を通して桂離宮の建物や庭の良さや美しさを表現しようと試みている。

森と堀口の桂離宮研究は、それぞれの立場から異なった方法により建築と庭園の結びつきを考察したものである^{注31)}。森と堀口の研究について建築家西澤文隆は「数寄屋論 ―堀口捨

己・村野藤吾・吉田五十八の建築と庭をみてー」(1983)のなかで以下のように記している。

堀口先生の論文を拝読していると、信頼の置ける文献のみから構築されていく状況に説得力があり、美事という他はない。論文も創作物であることがよくわかる。それは庭園における森蘊先生と正に双壁ではなかろうか。偏執狂的とも思われるデータ者の蒐集あってこそ美事な論が構築出来るのであろう。読んでいただけでも読むものの創作意欲をかき立てるだけのものがある。学者というより創作者の感があるのだ(西澤 1983 p.159)

西澤は森と堀口に共通する徹底的な資料蒐集による研究に創作としての価値を見出している。その上で、西澤は堀口の和風建築を「一般にすごく堅い」(西澤 1983 p.159)としながらも、庭については建築と庭園の結びつきという視点から評価している。

堀口先生のものには敷地全体の中で、室内と庭と環境をふまえて、一つの精神に貫き通されており、敷地全体が一つの空気、一つの風景の中にある。[…中略…]「家と庭の空間構成」の言葉の通り家も庭も含めて敷地全体に一つの空間として透徹した精神に置かれており、誠に伸びやかである(西澤 1983 p.163)

西澤は堀口の庭については「もしく数寄庭」という言葉がありとすれば先生の庭にこそ用いられるべき呼称のようだ」(西澤 1983 p.163)としている。

4. 森蘊と建築家 西澤文隆

4-1. 西澤文隆

西澤文隆は1915(大正4)年2月7日に滋賀県愛知郡秦荘町に生まれた。1940(昭和15)年に東京帝国大学工学部建築学科を卒業し、坂倉準三建築研究所に最初の所員として入所した。1943(昭和18)年にフィリピンに渡り日本文化会館の建設ならびに同事業促進に従事し、1944(昭和19年)にはバギオ日本文化会館支所を設立して、同会館長として文化活動に専念する。同年暮には現地召集を受けて入隊し、フィリピン島で終戦をむかえる。1946(昭和21)年に坂倉準三建築研究所に復帰し、1948(昭和23)年に坂倉準三建築研究所大阪支所を正式に開設するにあたり、同支所長として全責任を負うことになる。1957(昭和32)年5月から6月にかけて Diesel 記念公園建設のためにドイツに渡り、この間ヨーロッパ各国を見学する。1963(昭和38)年と1964(昭和39)年に台湾シオノギ工場建設のため台湾に渡り、この間高砂族の民家を見学のため入山した。1967(昭和42)年に大阪府総合青少年野外活動センターの設計により日本建築学会賞を受賞している。1969(昭和44)年9月に坂倉準三死去によ

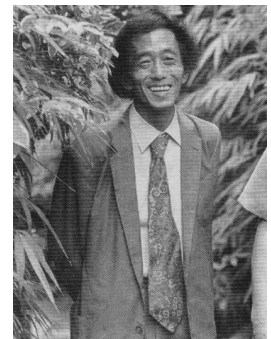


図17 西澤文隆
(新建築社 1999 p.172)

り、同年11月に株式会社坂倉建築研究所を創設し、代表取締役役に就任した。1975（昭和50）年から、韓国・台湾・インド・ネパール・バングラデシュ・タイ・トルコなどの建築見学旅行を積極的に行う。1985（昭和60）年に「神宮前の家（白倉邸）」ほか一連の住宅建築の設計により日本芸術院賞を受賞している。同年6月に株式会社坂倉建築研究所最高顧問に就任した。1986（昭和61）年4月16日に心不全により死去した。主な設計建物は、坂倉準三建築研究所時代に飯箸邸（1941）、上村松園邸（1947）、高島屋和歌山支店（1948）、室賀国威邸（1954）、塩野孝太郎邸（1955）、松下正治邸（1955）、Diesel 記念公園（ドイツ、1957）、Ribi 邸（1959）、仁木邸（正面のない住宅N邸、1960）、宮本邸（1960）、喜多邸（正面のない家K邸、1961）、平野邸（正面のない家H邸、1962）、楠本邸（1962）、近鉄登美ヶ丘住宅（ユニットプランの家、1963）、松下幸之助邸（1963）、枚岡市庁舎（1964）、西阪邸（1964）、大阪府総合青少年野外活動センター（1965）、紫式部記念園（京都・廬山寺、1965）、箕面観光ホテル・スパーガーデン（1968）、上阪邸（1968）、芦屋ルナホール（1969）などがある。株式会社坂倉建築研究所設立後にホテルパシフィック東京（1971）、大阪府立青少年海洋センター（1975）、西澤文隆自邸（1979）、シオノギ渋谷ビル（1980）、前橋市新庁舎（1981）、伊丹市柿衛文庫館（1984）などがある。主な著書に『西澤文隆小論集1 コートハウス論』（1974）、『西澤文隆小論集2 庭園論Ⅰ』（1975）、『西澤文隆小論集3 庭園論Ⅱ』（1976）、『西澤文隆小論集4 庭園論Ⅲ』（1976）、『建築 NOTE 西澤文隆 伝統の合理主義』（1981）、『日本庭園集成』全6巻（共著、1983-85）、『家家』（共著、1984）などがある。

西澤は庭園の研究、特に日本の伝統的な庭園の実測を通して建築と庭園の交互関係、空間のつながりや流れを研究し、そこから見出した日本の建築と庭園に特有の「透ける空間」を手がかりに、建築や住宅の設計を行った建築家である。

4-2. 庭への履歴書

西澤文隆は1978（昭和53）年4月発行の雑誌『庭』第39号のなかに「庭への履歴書」という文章を掲載している。そこでは、西澤はまず生まれ育った琵琶湖東岸での自然体験を述べ、また大学を卒業して坂倉準三建築研究所で働きはじめたころから、事務所近くの青山墓地へ行って植物図鑑と首っ引きで木の名前を覚えたとしている。その頃はまだ庭園に深い興味を持っていたわけではないが、何となく庭園への傾斜は感じていたかもしれないとし、当時の状況を以下のように説明している。

造形芸術（今のみづゑの前身か）という雑誌が出て、森蘊氏が平安朝時代の庭園や夢窓国師などの特輯を出したのは丁度その頃であっただろうか。弘文堂の教養文庫で岡崎文彬氏の『日本の庭園』が出たのもその頃、横井時冬^{注32)}氏の『日本庭園発達史』という名著の復刻本が出たのもその頃であったように記憶する

（西澤 1978a p.76）

森蘊は西澤より10歳年上であり、西澤が大学を卒業した1940（昭和15）年頃には平安から鎌

倉時代の庭園について研究の成果を発表しはじめており、西澤がそれらを手に取っていたことがわかる。特に、横井時冬『日本庭園発達史』は西澤が大学を卒業した年に復刻本が発行されており、すでにみたようにその校註を堀口捨己と森が行っている。『日本庭園発達史』については、西澤は村野藤吾との対談の中でも触れており、終戦直後一番に読んだ本であるとしている^{注33)}。

西澤が本格的に庭園に興味を持ちはじめたのは、戦後芦屋に住んで大阪で仕事をするようになり、当時あった「名園名席めぐり」という会に参加して毎日曜毎に京都に見学に出かけ、庭園を歩きまわりながら写真を撮り歩くようになってからのことである。西澤は「写真をバチバチ撮ったとは言っても盲滅法に撮っているわけではなく、対象と相対してこれぞと思うところを撮るのである」（西澤 1978a p.76）としている。その結果、西澤は庭園と建築の関係に興味を持つようになる。

庭園や建築の勉強が出来ただけではない、両者は切っても切れぬ深い関係の上に成り立っているのだということが体でわかった。[…中略…] 建築と庭園は互いからみ合って内外空間を含めて玄妙な空間に仕上っていくことになるのだ。[…中略…] 先づ室と庭との関係のあり方が第一であり、庭の構成の良さと細部の良さは次にこそくる問題である（西澤 1978a pp.76-77）

古建築や古庭園を見学して歩いているうち、建築や庭園は夫々独立物としても観賞には耐えうるが、それらは互にバラバラなものではなく、互に緊密に結びついており、その結合の密度の濃さが互を引き立て合っているものだということが納得された。日本の建築と庭園の良さはこの結びつきにこそあるのだと信じ込むようになった（西澤 1978a p.77）

このように庭園、特に庭園と建築の関係に興味を持つなかで、西澤は1953年頃から森と親交を持つようになる。西澤の庭園実測に参加し、西澤が自邸の設計をする時にその担当者を務めた金澤良春は当時のことについて以下のように記している。

実測以前の西澤にとっての日本庭園に関する興味の発端のひとつには、造園界の重鎮であった森蘊との親交がある。1953年頃からと聞いている。『平安時代庭園の研究』（1945）『中世庭園史の研究』（1959）『桂離宮』（1951）『修学院離宮』（1955）『小堀遠州』（1967）『日本の庭園』（1967）『寝殿造系庭園の立地的考察』（1962、奈良文化財研究所学報13）等、森は地形の測量を行ない、その図面を基に話をすすめる。西澤は実測の時にはこの図の提供を受けたり、著作から拡大トレースを行なって、ベースの図面を造っている。森蘊の研究の背景には藤島亥治郎、藤岡通夫、平井聖、村岡正らがいて、それぞれの研究テーマは西澤によく知らされている

た（金澤 2006 p.39）

西澤の庭園研究に森が大きく影響していたことがよくわかる。そのことは、近畿建築士会協議会が編集・発行していた雑誌『ひろば』1967（昭和42）年7月号に掲載された「建築と造園の対話」という対談で、当時の編集委員長であった西澤が森に対談への参加を依頼していることからわかる。さらに、日本建築学会の機関誌『建築雑誌』1978（昭和53）年10月号に掲載された「私の感銘を受けた図書」のなかで、西澤は森の『平安朝時代の庭園の研究』^{注34}）を取り上げ、「該博な知識の海の中に浸りながらものをつくる喜びが味わえる筆力と構築力は氏自身がつくる立場を忘れていない証拠のように思われる」（西澤 1978b p.7）と高く評価している。一方、森は前述の『家のはなし』（1950a、図8）のなかで土浦亀城や堀口捨己の設計した住宅とともに坂倉準三の設計した飯箸邸の写真を掲載している（図18）。また、これも先にみたように『日本の庭』（1960）のなかでは、庭園設計の評価が高い建築家として堀口とともに坂倉の名前を挙げている。坂倉準三建築研究所での飯箸邸の設計担当者は西澤である。



図18 飯箸邸 坂倉準三設計 西澤文隆担当
（森 1950a p.32-33間の挿絵）

さらに、金澤は西澤と堀口捨己の関係についても言及している。金澤は「西澤は学生の頃から堀口に師事することを考えていたくらいで、堀口の動向には常に注目していた」（金澤 2006 p.39）としていることから、西澤の庭園研究に堀口も影響を与えていたことがわかる。特に堀口が1965年5月に『庭と空間構成の伝統』を出版した時に、西澤はそれが建築家の著した庭園書として「自然と庭園と建築が一体となって空間構成を現成する」という点がいままでの庭園書には存在しなかった部分であるとして高く評価している。その一方で、西澤は建築家であるなら写真ではなく図面で論述を行なう必要があるとしている^{注35}）。

そのころ、1966（昭和41）年に西澤は美術出版社から「建築と庭園の関わり」についての本を出すことを依頼される。そのときのことを西澤は以下のように述べている。

日本の庭園と建築の関わり合いについて本をつくって見ないかという誘いを受けたのは丁度その頃のことであった。建築や庭の図面は随分とあることだから、能因法師のように鉄とのりで図面をつくれればよい位に考えて気易く引き受けたことであった。ところがいざ調べてみるとそんな巧い図面は何処にもない。夫々の学者は名園なら名園を研究しているだけで、それが建築にどのように関係しているかなど考えてもいない。古建築の方も同様で、その関り合いを本にするということは、日本のみならず世界でも稀有のことがらだったのである。[…中略…] 図面は全く新しく実測して起すより手はないのである（西澤 1978a pp.77）

西澤は、当時の図面について「いわゆる名庭と称せられる庭は、庭だけが単独にあつかわれたものがほとんどで極所に限られ、建築はまた建築で由緒ある部分に限られていて、庭と建築の連なりどころか、建築と建築の連なりさえも表出されていない」（西澤 1988c p.109）^{注36} ものばかりであったとしている。この「建築と庭園の関わり」についての本を出すことをきっかけとして、西澤は日本庭園の実測をはじめることになる。

ところで、庭園と建築の図面については西澤より前に森は同様の意見を持っていた。森は「私の実測圖では、必要以上の時間をかけて現存建築の間取りその他をはかり、それを圖示した」（森 1960 p.9）とし、その理由のひとつとして、もし庭の作者がはっきりしない時に、それと同時に造営された建物の作者またはその由縁の技術者から庭の作者を推定しようという意図を挙げた上で、もうひとつの理由として、それまでの庭園と建築の図面の問題を挙げている。

第二には庭園の美は建築と共にあるという私の三十年來變らぬ信念から、庭の作風を知るには、庭の利用上の據點となるべき建築に関連して、その觀賞の場所または地點を明瞭にしたり、景觀の一要素として、見且つ見られる位置にある兩者の相互關係を、より詳細に究めようと努めたことである。しかし從來の建築關係の実測圖だと建築の部分は正確でも、環境の部分が經視され勝ちであつたし、庭園關係の実測圖だと、建築の方が見取圖的に杜撰であつたというように、共に不完全であつたことに對する私の氣持の上での不満が、私をこの種の仕事に没頭させ、このような實測圖作製の面倒な仕事にかり立てる動機となつたのである

（森 1960 p.10）

森と親交のあった西澤は、この文章も読んでいたと考えられる。そして、自身が「建築と庭園の関わり」についての本を依頼された時に全く同じ状況に直面したのであろう。その上で、1967（昭和42）年に西澤が実測を開始した時に、西澤は森から実測図の提供を受けたり、森の著作から拡大トレースを行なって、実測のためのベース図面をつくったのである。

4-3. 実測図

西澤文隆は『西澤文隆小論集3 庭園論Ⅱ』（1976、以下単に『庭園論Ⅱ』と表記する）の図版として、嵯峨院・平等院・浄瑠璃寺・毛越寺・法金剛院・南禅院・西芳寺・天龍寺・桂離宮の図面について、森の実測図または著作を参考として作図したことを記している。また『日本の建築と庭 西澤文隆実測図集 解説編』（2006）によると、嵯峨院・西芳寺・天龍寺・二条城・桂離宮・仙洞御所・大宮御所・修学院離宮について、森の実測図または著作から起したベース図面をもとに西澤の実測が行なわれたことがわかる^{注37}。なお、『庭園論Ⅰ-Ⅲ』について西澤は「忙がしい建築家たちのためには安直に理解して貰えるような形にして伝達しておきたい。造園家にも一建築家の考えを通してもう一度庭園を見直して欲しい—と大変欲張った考え」（西澤 1975 p.421）からつくった本であるとしている。

ここで西芳寺を取り上げて、森と西澤の実測図の比較をしてみる。森の西芳寺実測図は『中世庭園文化史』に収録されている(図19)。西澤の『庭園論Ⅱ』の西芳寺現状図は森の『中世庭園文化史』の実測図をもとに作図されている(図20)。さらに、西澤は森の『中世庭園文化史』の実測図をもとに作製したベース図を用いて現地の実測を行ない、西芳寺実測図を描いている(図21)。森の実測図の特徴は、先にみた森の言葉通り庭園とともに建築の間取りが正確に描き込まれていることであり、さらに等高線と海拔標高の数値が描き込まれていることである。

これらの実測図は、これまでのどの庭園の本に使用されたものとも違うのである。どこが違うかというと、平面図のほかに、高低差即ち地形の凸凹を示す等高線を入れ、海拔標高の細かい数字を添えている点である。これだけあれば、もし他日災害により、その庭園が破壊された場合には、いつでも復舊できるような資料として活用できる
(森 1960 p.5)

西澤の『庭園論Ⅱ』現状図および実測図は、これを踏襲している。このことから西澤が「建築と庭園の関わり」を表現した図面として森の実測図を評価していたことがわかる。

一方、相違点としてまず気付くのは、森の実測図と西澤の『庭園論Ⅱ』図版は北が図面右方向になっているのに対して、西澤の実測図では北が図面上方向になっていることである。これは西澤が建築図面のルールに合わせて変更したものと考えられる。もうひとつの大きな相違点は、森の実測図には樹木が描き込まれていないのに対して、西澤の実測図には樹木が描き込まれている点である。森の実測図に樹木が描き込まれていないことについて、森は「この実測図の中で、私は地形と庭石とに重きを置き、一般には庭石と共に、否、場合によつては庭石以上に大切な樹木を省略したことがあるので、不審がる

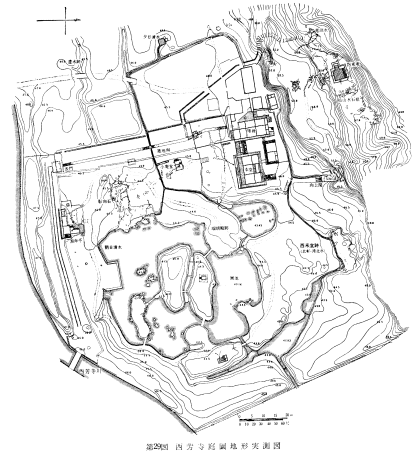


図19 西芳寺実測図 森
(森 1959 p.62-63間の挿絵)

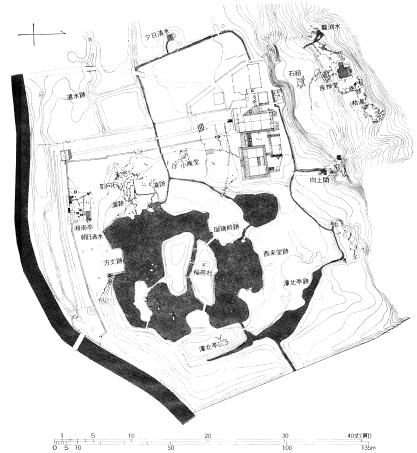


図20 西芳寺現状図 西澤文隆
(西澤 1976a p.86)



図21 西芳寺実測図 西澤文隆
(西澤文隆「実測図」集刊行委員会 1997 p.19)

人が多かろうと思う」(森 1960 pp.5-6) とし、その理由を以下のように説明している。

そもそも庭園を構成している自然材料としては、水・土・木・石などがあるが、そのうちで樹木だけは生物として、発芽し、發育し、枯死し、時には樹齡をまたずに人爲によつて移植され、伐採されることさえも屢々ある。それに對し庭石の方は故意に改造すれば別であるが、發育もせず、枯死もせず、また重量感があるので、移動もしにくい。その上、その個々の姿や配置法を通じて作庭年代や、作者の特徴が一番よく表現されるのも庭石である (森 1960 pp.6)

森は日本庭園の「作者の性格と流派の傾向、作風の特色を論じ、日本の庭のよさ、面白さを浮き彫りに」(森 1960 pp.9) するためには地形と庭石を重視することが必要であるとしている^{注38)}。

しかも、樹木の下にあることが多いため、樹木と庭石とを同じ圖上に描くことにすると、重なつて見にくい場合が多い。さらに大小を問わず、石を尊重せねばならぬとなると、一番に變化しやすいものであるとの理由で、樹木の現場に於ける測定は勿論行い、鉛筆仕上げの原圖にはていねいに圖示はしているが、一枚にまとめる場合には簡略にし、殊に製版する際には樹草だけを省略する方が都合がよいと考えたからである (森 1960 p.6)

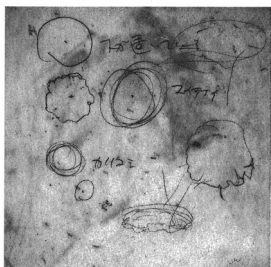
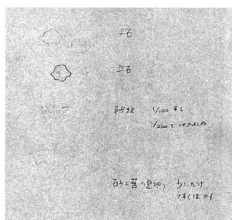
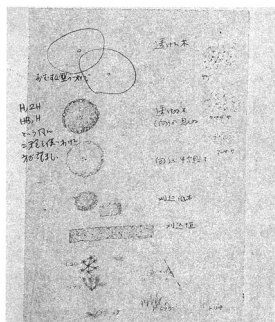
森の庭園研究は、徹底した文献研究とともに、実測による現在の地形・地物の精密な形状把握の上に地形学的な考察を加えることにより、もとの地形などを復原しながら作者の意図を読み取ることが目的であることから、実測図の表現も地形と庭石を重視したものになっているのである。これに対して、西澤は実測図について以下のように述べている。

私の図面は単なる建築や庭ではなく、環境の中でいかにそれらの庭たちや建築たちが生きているかを表出しなければならない。[…中略…] 私はむしろ正確を期することをやめて —正確とは一体なにかという問題がある。純客觀的正確ということはある得ようはずがないのだ— 私の感じとったもの、私の表出したいと思うものを表出すればよい。それがただいまの私にとって、もっとも正確な姿を写したことになる (西澤 1988c p.113)

西澤の実測図では樹木の表現を重視し、等高線はごく薄く表現されており、海拔標高の数値は記入されていないものが多い。さらに実測図を完成させるにあたって西澤がつくった凡例によると樹木を「透けた木」「透けぬ木」「向うが半分見える」などに描き分け、庭石も「立石」「平石」の別を表現していることがわかる (図22)。ここに、西澤が日本の建築と庭園の特質として

みなした「透ける空間」という「建築と庭園の関わり」を実測図で表現しようとする意図をみることができる(図23)。

図面を完成するに当たって西澤が凡例を造っているの、ここに示す。以下のすべての平面図はこの凡例に従って描いている。西澤の自筆であっても他の人が描いても凡例を守れば同じと考えている。



平面図凡例

図22 実測図凡例 西澤文隆
(西澤文隆実測図集刊行会 2006 p.74)

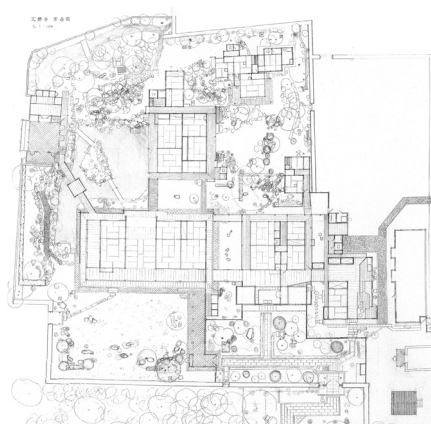


図23 芳春院実測図(部分) 西澤文隆
(西澤文隆「実測図」集刊行委員会 1997 p.39)

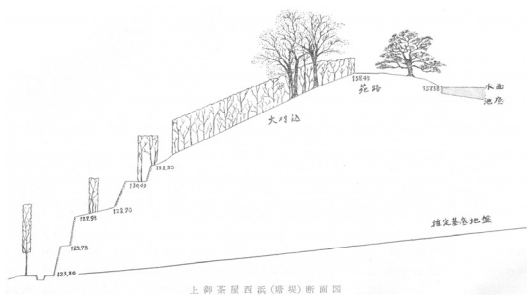


図24 修学院離宮 上御茶屋西浜(塘堤)断面図 森蘊
(森 1954 p.87)



図25 東本願寺涉成園断面図(部分) 西澤文隆
(西澤文隆「実測図」集刊行委員会 1997 p.68)

さらに、森と西澤の実測図の相違点がより明確に現れているのが断面図の表現である。森は日本庭園の特色について以下のように述べている。

なだらかな池の岸邊の勾配や、やわらかな築山の傾斜面、または通路（飛石・敷石道を含む）の快い起伏、おつとりとした橋の反りなど、自然風景式である日本の庭の本當のよさは、高低測量によらなければ描き出せないのではないかとさえ考える（森 1960 p.9）

森はこの考えから実測した庭園の主要な部分の断面図を描いている（図24）。森の断面図は平面図の表現方針と同様に地形の表現が主となっており、海拔標高の数値が描き込まれているが、樹木の表現については樹種の違いは表現されているものの記号的なものとなっている。これに対して、西澤の実測断面図は建築の姿とともに樹木の様子が柔らかい筆致で描かれており、ここでも「透ける空間」という「建築と庭園の関わり」の表現が意図されている（図25）。

森の実測図は復元的研究によって築庭時点での「作者の性格と流派の傾向、作風の特色を論じ、日本の庭のよさ、面白さを浮き彫りに」（森 1960 pp.9）することが目的であったのに対して、西澤の実測図は「透ける空間」という西澤の考える日本の建築と庭園の本質を、実測時点での状況から描き出そうという試みであったと考えられる。これは庭園研究者と建築家という立場の違いによるものであるが、そこにはそれまでの建築や庭園の図面では表現されていなかった「建築と庭園の関わり」を描くという共通点がみられ、森の考え方が西澤に影響を与えていたことがわかる。

4-4. 伝統の合理主義

実測を続けるなかで、西澤は「巻尺やコンベックスを流して実測していると、体と対象物の関係が全く一つに融合さざるを得ないということがあるせいか、かつて写真を撮り狂った瞬間とは全く異なる心情の中にある自分に気が付く」（西澤 1981 p.33）として、より庭園と一体となっていると感じるようになる。そして、かつての庭師や大工たちの仕事について、「形は心の赴くままにつくり出されるのではなく、合理に徹しきってつくるのである」（西澤 1981 p.34）とし、日本の建築や庭園の中に「伝統の合理主義」をみるのである。

形は合理に徹してこそ生み出される。生み出すのはものの真髄を芯の芯まで知り尽すことによって、ものをものとして生動させる人間性の発露がここに見られる（西澤 1981 p.34）

物の本質をしっかりとつかみとり、先人の道を謙虚に学び、どんな要求にもひるまず全身全霊を傾注するのでなければものが生み出せるはずがない。／合理の精神に徹し切れば、遊び心も自由に流動する。[…中略…] ものの本質を体で理解し

尽くすのでなければ、遊び心など出ようはずがない。本当にものを躍動させうるのはこの遊び心なのだ（西澤 1981 p.108）

そして、西澤は「庭をつくる心構えとしては、建築同様に合理性の芯に貫かれたかに見える」（西澤 1981 p.202）として、庭園についても「伝統の合理主義」をみてとることができるとしている。

5. おわりに

本稿では、建築と庭園のつながりをもとめた庭園研究者で造園家でもある森蘊と、日本の伝統的な建築と庭園の研究から得た視点をもって住宅の設計をした建築家である堀口捨己と西澤文隆について、それぞれの著作などから昭和初期から戦後にかけての庭園研究者・造園家と建築家の関係を探った。

堀口の日本庭園研究は、各方面の文化人との幅広い親交により蒐集された秘伝書類や洛中洛外屏風絵など、信頼の置ける文献のみから構築されたものであり、さらに建築家としての鋭い創作意識を持った現地調査と考察を通して、茶室・茶庭に「生活構成の芸術」を見出し、自然と庭園と建築が一体となって現出する「家と庭の空間構成」を見出していった。そのなかには、一部に森の研究を参考にしているものがみられた。

森の日本庭園研究は、外山英策・吉永義信とともに堀口の研究に影響された徹底した資料の収集と分析、および精密な実測による現地調査と地形学の基本的法則による地形変化の推測、さらに現存建築の詳細調査による「復元的考察」により、建築と一体となった「日本庭園の実用性」を明らかにしようとしたものであり、日本庭園を「純粹美術に近い先達の遺品」とみなして、その優れた部分を将来の日本庭園文化の発展に役立てようというものであった。

西澤の日本庭園研究は、堀口や森の研究の影響を受け、日本庭園の実測を通して樹木を含めた建築と庭園の関わりを表現した平面図や断面図を描くことにより、日本の伝統的な建築と庭園の特質としての「透ける空間」、さらには日本の建築と庭園にみる「伝統の合理主義」をとらえようとしたものであった。

彼らの研究に共通しているのは建築と庭園を一体のものとしてとらえ、そのつながりを明らかにしようとした点にある。さらに、堀口の「生活構成の芸術」「家と庭の空間構成」、森の「日本庭園の実用性」「純粹美術に近い先達の遺品」、西澤の「透ける空間」「伝統の合理主義」などの視点は、大正期の庭園改造にみられた日本の伝統的な庭園を「観賞本位」として、新しい時代の庭園として「実用本位」を求めるという単純な議論とは違い、また日本庭園の形式を安易に継承するものでもなく、日本の伝統的な建築と庭園の本質をつかみとることにより、新しい住宅における建築と庭園をつくり出すための創造的研究であった。

そして、昭和のはじめには建築家の庭園への関心は低かったのに対して、昭和10年頃から堀口、また戦後には西澤のように庭園に強い関心を持つ建築家が現れ、森と堀口・西澤には実作を通しての連繋はないものの、庭園研究者と建築家との間に研究の面での交流があり、お互いに評価し、影響を与えていたことがわかった。

		堀口捨己 (1895-1984)	森蘊 (1905-1988)	西澤文隆 (1915-1986)
1895年	明治28年	1月6日 岐阜県本巣郡席田村に生まれる		
1905年	明治38年		8月8日 東京府立川村に生まれる	
1913年	大正2年	旧制岐阜中学（現岐阜県立岐阜高等学校）卒業		
1915年	大正4年			2月7日 滋賀県愛知郡秦荘町に生まれる
1917年	大正6年	第六高等学校（旧制）卒業		
1918年	大正7年		青柳小学校卒業	
1920年	大正9年	東京帝国大学建築学科卒業 同大学院で近世建築史を専攻 分離派建築会の運動を興す		
1921年	大正10年	平和記念東京博覧会記念塔、動力機械館など		
1923年	大正12年	ヨーロッパ留学（1924年1月まで）	東京高等師範学校附属中学校卒業	
1924年	大正13年	『現代オランダ建築』		
1925年	大正14年	小出邸		
1926年	大正15年	紫烟荘		
1927年	昭和2年	『紫烟荘図集』、双鐘居		
1928年	昭和3年	『住宅 双鐘居』	浦和高等学校理科乙類卒業	
1929年	昭和4年	『現代建築大観』		
1930年	昭和5年	吉川邸、徳川邸『一混泥土住宅図集』		
1931年	昭和6年	九州気象台、塚本邸		
1932年	昭和7年	帝国美術学校教授 『建築様式論叢』 「現代建築に現はれたる日本趣味」	東京帝国大学農学部農学科卒業	
1933年	昭和8年	中央気象台品川測候所、岡田邸	内務省衛生局事務取扱 企画課勤務 「毛越寺に於ける藤原時代造園遺蹟の研究」	
1934年	昭和9年	永井邸	東京帝国大学大学院修了	
1935年	昭和10年	『茶道全集』全15巻の編集（1937年まで） 飯塚測候所、荒尾邸、水戸地方気象台		
1936年	昭和11年	日本工作文化連盟設立、理事長に就任 「一住宅と其庭園」「茶室の思想的背景と其構成」、中西邸		第三高等学校理科甲類卒業
1937年	昭和12年	取手競馬場、内藤邸、聴禽寮		
1938年	昭和13年	山川邸、神戸海洋気象台、大島測候所 堀口が日本庭園協会の理事に就任した際、森は評議員のひとりであった	厚生省体力局事務取扱 厚生技手 体力局施設課勤務 「平等院庭園考」	
1939年	昭和14年	若狹邸	「平安時代前期庭園に関する研究」 「平安鎌倉時代の造園技術」	
1940年	昭和15年	横井時冬著『日本庭園發達史』註校 堀口捨己・森蘊		東京帝国大学工学部建築学科卒業 卒業設計に対して辰野賞牌を受賞 坂倉準三建築研究所入所
1941年	昭和16年	論文「利休の茶」により北村透谷賞受賞 西郷邸	東京市技手 市民局公園課勤務	シャルロット・ベリアンが工芸指導所の招聘 に応じて来日、ベリアン展のための家具図面 手伝い 飯箸邸
1942年	昭和17年	「君台親左右帳記の建築的研究 室町時代の 書院及茶室考」		レオナルド・ダ・ヴィンチ展 組立住宅開始 伊勢神宮の架構の研究 社寺建築の角南隆先生の指導を受ける
1943年	昭和18年	奈良慈光院の実測 茶道文化研究会設立 「洛中洛外屏風の建築的研究」	東京市技師 公園部技術課勤務	比島に渡り、日本文化会館の建設並びに同事 業促進
1944年	昭和19年	工学博士 学位論文「書院造りと数寄屋造 りの研究 一主として室町時代に於けるその 発生と展開について」	東京都井之頭恩賜公園自然文化園長 正七位 「日本庭園の伝統」	バギオ日本文化会館支所設立、同会館長とし て文化活動に専念 バナイ島イロイロにて文化活動 現地召集を受け入隊
1945年	昭和20年	「茶の湯の精神」	海軍技師 ボルネオ民政部勤務 高等官六等 『平安時代庭園の研究』	龍村邸

1946年	昭和21年	東京大学講師 岩波茂雄墓	復員 東京都立農事試験場勤務	坂倉準三建築研究所に復帰 関西建築工業 KK 設計課長兼務 茶室及び日本建築の研究
1947年	昭和22年		東京植木株式会社勤務（研究部長） 国立博物館保存修理課兼事業課勤務	奈津と結婚 上村松園邸
1948年	昭和23年	文化財保護専門委員 第二分科会（建築）・第三分科会（庭園）を兼ねる 『草庭 ―建物と茶の湯の研究』	国立博物館調査員 保存修理課勤務	坂倉準三建築研究所大阪支所を正式に開設 同支所長として全責任をとる 高島屋和歌山支店
1949年	昭和24年	明治大学教授（1965年まで） 『利休の茶室』 尖石遺跡復元住居	文部技官 『まぐらの住居』	
1950年	昭和25年	『利休の茶室』により日本建築学会賞（論文賞） 八勝館御幸の間	国立博物館保存部建造物課勤務 『美しい庭園 ―観賞と造庭―』 『日本の庭園』	大阪スタジアム、高島屋ニューブロードフロア
1951年	昭和26年	八勝館御幸の間により日本建築学会賞（作品賞） 『利休の茶』	東京工業大学非常勤講師 『桂離宮』『桂離宮と修学院』	名園名所の探求 西武商店
1952年	昭和27年	『桂離宮』	奈良文化財研究所建造物研究室長	クラブ関西、料亭泉
1953年	昭和28年	『桂離宮』により毎日出版文化賞を受賞	奈良県文化財専門審議会専門委員 『生活の歴史・はくたちの研究室』 今西清兵衛邸露地	武田健一郎、鈴木剛邸
		このころ森繭と西澤文隆の親交が生じる		
1954年	昭和29年	扶桑相互銀行岡山支店	工学博士 学位論文『桂離宮の研究』 『修学院離宮庭園の復元的研究』	室賀国威邸
1955年	昭和30年	サンパワロ日本館、万葉公園と万葉館および万葉亭、三朝温泉旅館後楽、料亭植むら	『桂離宮の研究』『修学院離宮』	支那庭園の研究、Module の研究 塩野孝太郎邸、松下正治邸
1956年	昭和31年	大森の小住宅（自邸）	横浜国立大学非常勤講師 『新版桂離宮』、唐招提寺本坊客殿庭園	村川邸
1957年	昭和32年	日本芸術院賞受賞 静岡雙葉学園講堂・体育館、岩波茂雄邸	奈良県立公園審議会委員 奈良女子大学非常勤講師 『日本の庭園』 東大寺竜蔵院庭園	Diesel 記念公園建設のため渡独 この間ヨーロッパ各国を見学 南海会館、塩野義製薬西宮寮、坂倉準三建築研究所大阪支所
1958年	昭和33年	八勝館八事店さくらの間・きくの間 明治大学駿河台6号館・7号館	『にわ・玉川こども百科77』 『日本の燈籠』（アサヒ写真ブック） 法華寺犬の庭、大神神社参集所内苑	クラブ関西新館、高松邸
1959年	昭和34年	明治大学駿河台図書館	『中世庭園文化史』、加満田旅館庭園	心斎橋アーケード、Ribí 邸、安部邸、神保邸
1960年	昭和35年	明治大学和泉第二校舎	日本建築学会賞受賞『中世庭園史の研究』 『日本の庭』、唐招提寺御影堂庭園	伊賀上野公民館、仁木邸（正面のない住宅）、宮本邸
1961年	昭和36年	常滑市陶芸研究所	三本松公園孔雀園	塩野義製薬中央研究所、喜多邸（正面のない家）、出光興産高槻社宅
1962年	昭和37年	静岡サンモール修道会・礼拝堂	『寝殿造系庭園の立地的考察』 『TYPICAL JAPANESE GARDENS』 中村英之介邸庭園	西洋造園史研究、支那庭園研究、日本庭園研究、都市空間研究、寝殿造、書院造研究 Munchen Deutsche Museum 茶室、塩野義製薬杭瀬工場、平野邸（正面のない家）、楠本邸
1963年	昭和38年	紫綬褒章	奈良県文化賞受賞 大神神社宮司社宅庭園、松尾寺外園	台湾シオノギ工場建設のため渡台 松下幸之助邸、坂本邸、野村邸、山岡邸 近鉄登美ヶ丘住宅（ユニットプランの家）
1964年	昭和39年	白川邸、明治大学生田校舎1号館 静岡雙葉学園普通教室棟	『日本の庭園』	台湾シオノギ工場建設のため再度渡台 この間高砂族の民家を見学のため入山 中国風民家の見学 アンコールワットの遺跡跡を1週間に亘り見学 枚岡市庁舎、山本邸、小野邸、西阪邸、真鍋邸
1965年	昭和40年	神奈川大学教授（1970年まで） 『庭と空間構成の伝統』 明治大学生田校舎2号館・3号館・斜路、欄居	大阪府文化財専門委員	大阪府総合青少年野外活動センター 築式部記念園（京都・廬山寺）
1966年	昭和41年	勲三等瑞宝章 福岡雙葉学園講堂・体育館、小学校舎	奈良都市計画地方審議会委員 『小堀遠州の作事』	関根邸、バルワニ邸、小菅邸、鶯花荘
1967年	昭和42年	八勝館中店	奈良国立文化財研究所退職 史跡観自在王院整備専門委員会委員 社団法人日本観光協会専門委員 『小堀遠州』（人物叢書140）『桂離宮』 橿原神宮文華殿庭園、慈光院新書院庭園	日本建築学会賞受賞（大阪府総合青少年野外活動センター） 建築と庭園の関係を究明すべく実測開始 牛谷邸、里井邸、中野邸、葛城山国民宿舎
		対談『建築と造園の対話』（『ひろば』7月号）		
		西澤が森に対談参加を依頼する		

住宅における建築と庭園 —— 庭園研究者・造園家 森蘊と建築家 堀口捨己・西澤文隆 ——

1968年	昭和43年	大原山荘	庭園文化研究所設立 奈良国立文化財研究所調査員、桜井寺庭園	箕面観光ホテル・スパーガーデン、荒川守正邸、中村邸、上阪邸
1969年	昭和44年	日本建築学会大賞 中店八勝館により第一回中部建築賞 『茶室研究』	日本萬国博覧協会日本庭園委員会委員 『庭園とその建物』（日本の美術34） 矢田寺大門坊露地、郡山城跡市民文化会館庭園、和久伝旅館庭園、海眼寺庭園	9月1日 坂倉準三逝去 株式会社坂倉建築研究所設立、代表取締役として全員を統括 芦屋ルナホール、晴山荘、杉山邸
1970年	昭和45年	神奈川大学教授	日本造園学会賞受賞 『桂離宮他日本庭園史に関する一連の研究』 滋賀県文化財保護審議会委員 奈良市史編集審議会専門委員 『住宅庭園・茶庭 一空間とデザイン』	西村邸、武田邸、山田邸
1971年	昭和46年	『現代建築家全集4 堀口捨己』	千葉大学非常勤講師 『奈良を測る』、九品寺庭園	ホテルパシフィック東京、奈良県立青少年野外センター、青山台の家
1972年	昭和47年	如庵移築	史跡白水阿弥陀堂境域復元整備委員会委員 『桂離宮』（日本の美術79） 講御堂寺庭園、延命寺庭園、粉河寺本坊庭園	長崎県立青少年の天地、緑ヶ丘の家、新神戸大プール
1973年	昭和48年	茶室清恵庵	和歌山県文化財保護審議会委員 『庭ひとすじ』 東福寺即宗院庭園	芦屋市立精道幼稚園、豊中市立少年自然の家、神戸市立自然の家
1974年	昭和49年	『堀口捨己作品・家と庭の空間構成』	毎日出版文化賞受賞 『小堀遠州』 『日本の庭園』	大阪府知事賞受賞 『西澤文隆小論集1 コートハウス論』 長崎県立千々石少年自然の家、宝塚市立少年自然の家、バンジョ
1975年	昭和50年		桂離宮整備懇話会委員 勲三等瑞宝章 『修学院離宮』（日本の美術112）	韓国視察旅行 『西澤文隆小論集2 庭園論I』 千里山の家、宮崎県総合青少年センター・青島少年自然の家、大阪府立青少年海洋センター、群馬ロイヤルホテル、埼玉県青少年総合野外活動センター
1976年	昭和51年		史跡称名寺境内保存整備委員会委員 三重県文化財保護審議会委員 文化財保護審議会第三専門調査会専門委員	団長として中部インド横断見学 『西澤文隆小論集3 庭園論II』 『西澤文隆小論集4 庭園論III』 芦屋市民センター別館
1977年	昭和52年		若原正善邸庭園、創生苑庭園	台湾見学旅行、浅岡医院
1978年	昭和53年	『書院造りと数寄屋造りの研究』	大久保昭教邸庭園、今西啓師邸庭園	韓国見学旅行、ネパール、北部インド見学旅行 神戸市立王子スポーツセンター
1979年	昭和54年		奈良商業高校庭園、高野山持明院庭園	中国見学旅行 大阪府生野警察署、能勢の郷、西澤文隆自邸
1980年	昭和55年	『堀口捨己歌集』	フランクフルト市パルメンガルテン植物園にて日本庭園史展開催（計画・設計を担当）	シオノギ渋谷ビル
1981年	昭和56年		特別名勝毛越寺庭園整備委員会委員 『庭園の旅』、菊屋嘉十郎邸庭園	『建築 NOTE 西澤文隆 伝統の合理主義』 埼玉県青少年総合野外活動センター、前橋市新庁舎
1982年	昭和57年		京都市文化財保護審議会委員 名勝旧大乗院庭園保護管理委員会委員 和歌山城二の丸庭園	インド南部、バングラデッシュ、タイ見学旅行 台湾講演（台北、台中、高尾） 埼玉県立名栗少年自然の家、群馬県立女子大学
1983年	昭和58年		和歌山市文化賞受賞 西福寺岐阜支坊庭園	台湾旅行 『日本庭園集成』全6巻（共著、～85年）
1984年	昭和59年	死去（享年89歳）	『日本庭園史話』（NHK ブックスカラー版15）	伊丹市文化賞受賞 トルコ見学旅行 『家家』（関西建築家4人の共著） 伊丹市柿衛文庫館
1985年	昭和60年		薬師寺八幡院庭園	株式会社坂倉建築研究所最高顧問に就任 日本芸術院賞受賞、滋賀県文化賞
1986年	昭和61年		『日本史小百科・庭園』、『作庭記』の世界 紫式部記念庭園	4月16日 心不全にて死去（享年71歳） 勲四等旭日小綬賞受賞
1987年	昭和62年		上原敬二賞受賞	
1988年	昭和63年		死去（享年83歳）	

註

- 注1) 『造庭建築』(1936)は造園家西川友孝が雑誌『建築・造園・工藝』に掲載された記事を建築家と造園家が提携、協力すべきものであることを明確に示すことを目的として再編集したものである。
- 注2) 古宇田 1931 p.2 古宇田は「近時の建築家で庭園について無關心の方が多いのには亦驚かせられる」としている。
- 注3) 上原敬二：住宅と庭園の設計，嵩山房，1919(T8). 大屋靈城：庭本位の小住宅，裳華房，1924(T13). 西川友孝：近代的な小住宅，資文堂書店，1930(S5). (近代的な住宅と小庭園，文京堂，1936(S11). として再版) 西田富三郎：新時代の庭園と住宅，太陽社，1934(S9). などが挙げられる。
- 注4) この文章は森蘊が日本建築学会に入会して50年目に終身会員となった際に掲載されたものである。
- 注5) 森 1973 p.12 このとき森は田村剛の造園学の講義について「そのはじめごろには日本庭園史をやるなどとは思わず、洋行帰りの新知識のにじみ出る西洋庭園のあたりが一番おもしろく感じられた」としている。
- 注6) 森 1981 p.2 森は田村剛の造園学を昭和4、5、6年と3年間続けて受講した。「先生の講義録を取り出して見ると、最初の年は世界の庭園を主として述べ、次の年には公共造園、第三年目は風景計画に重きを置くというふうに、個人庭園、都市庭園、自然公園問題を、三年間年別に聞かせてもらい、これが本当の造園学というものかに関心したものである。しかも何といっても最初の年の講義でたっぷり日本庭園のお話がうかがえたのは楽しかったし、そのため私の関心が日本庭園に急角度に傾いたようであり、とうとう一生をこの道に没頭するような運命になったのだと思う」
- 注7) 森 1981 p.2 当時の庭園について「当時は現今と違って御所、離宮はもちろんのこと、社寺拝観、ことに庭園の鑑賞者など全然なかったといった方がよい時代で、どこへ行ってもゆっくりと拝見できたとし、所有者、管理者の方々からそこの由緒などていねいに説明していただけたのである」としている。
- 注8) 森 1973 p.23
- 注9) 森 1973 p.24
- 注10) 森 1971 p.13、1973 p.28、1983などに記述がある。
- 注11) 森 1973 p.29
- 注12) 森 1971 p.15、1973 p.34、1981 p.18などに記述がある。
- 注13) 上原 1983 p.84
- 注14) 稲垣他 1996 p.232
- 注15) 日本文化名著選はともに文学博士の三上参次と西田直二郎の監修である。なお、創元社では日本文化名著選の刊行が開始された1938(昭和13)年から小林秀雄が編集顧問となっている。
- 注16) 横井 1940 凡例 p.1
- 注17) 「建築における日本的なもの」は『思想』1934(昭和9)年5月号、「茶室の思想的背景とその構成」は『茶道全集 巻3 茶室編』1937(昭和12)年 創元社にそれぞれ掲載された。ともに堀口 1948に収録されている。
- 注18) 森の研究として「鳥羽殿庭園考」、「山水並野形圖遞傳中の造園家について」、「法金剛院の庭園について」、「枯山水に就て」、「永福寺に於ける鎌倉時代前期に於ける造園遺蹟の研究」、「泉殿釣殿の研究」、「室町時代に於ける前栽秘抄の影響」、「龍安寺庭園の研究」、「金閣寺と法水院」が挙げられている。一方、堀口の研究としては「茶庭と其精神」が挙げられている。
- 注19) 森 1981 pp.4-8 森は外山英策『源氏物語と日本庭園』(1927)から日本庭園史は信頼できる文献の徹底的な蒐集とその選択から始まると学び、吉永義信から日本庭園史の先輩として周到なる文献資料の蒐集とその慎重な取扱いについて学んだとしている。
- 注20) 森 1973 p.122; 森 1962 pp.84-85 「室町時代(平安京)の湧泉と著名庭園」、あるいは昭和42年に神奈川県立博物館から依頼を受けて中世武家住宅模型をつくった際に「洛中洛外屏風絵」の細川管

領邸の復元的研究を企図したとしている。

注21) 「泉殿釣殿の研究 ―泉殿に就いて―」『宝雲』第25号 1939(昭和14)年、「泉殿釣殿の研究(中) ―泉殿に就て―」『宝雲』第26号 1940(昭和15)年、「泉殿釣殿の研究(下) ―釣殿に就て―」『宝雲』第27号 1941(昭和16)年にそれぞれ発表されている。

注22) 田中 2012に取り上げた。

注23) 田中 2014に取り上げた。

注24) 森 1950c p.148

注25) 森 1950c p.152

注26) 森 1950c p.167

注27) 森 1950c p.193; 堀口 1949 p.445に取り上げられている。

注28) 堀口 1948のなかの「茶室の思想的背景とその構成」において考察が行われている。「茶室の思想的背景とその構成」は昭和7年に出版された『建築様式論叢』に収録されたものを『草庭 建物と茶の湯の研究』に再録したものである。

注29) 堀口 1973a

注30) 森他 1960のなかで「復元的考察」についての詳しい解説が行われている。

注31) 森 1960 p.319 「跋文 ―桂離宮の改版に際して―」のなかで森は「昭和二十六年九月に私の『桂離宮』創元選書二一五號の初版が出たすぐ後で、私がこの著書の中ではじめて公にした數多くの文獻資料が、急にあちらこちらで重寶がられ、八條宮親王身邊のこと、小堀遠州と中沼左京の關係、藤原時代の遺跡の問題のことなどが、いくつかの他の著書や論文の紙面をにぎわしたことを嬉しく思っている(中でも最も著名なのが、堀口捨己博士解説毎日新聞社發行の『桂離宮』である)」として、堀口の著書に自分の研究が参照されていることを喜んでいる。一方、和辻哲郎などによる批判に対しては「私の引用したものだけを裏返して異論をとなえるのではなく、完全に別な資料の提出を願いたいものである」あるいは「如何に學界に著名な美學者や建築家といえども、それだけの實地調査を経ない人の説を信じ、中書院、古書院の接着の問題や、初期桂山莊の姿などについて私を非難するのは輕率であると思う」と反論している。

注32) 西澤 1978a p.76の文章では「横井時彦」となっているが、明らかな間違いだと考えて「横井時冬」と修正した。

注33) 西澤 1988b p.87 「緑・人・自然 ―[対談・村野藤吾]」のなかに記述がある。初出は雑誌『都市住宅』1973年5月号である。この対談のなかで村野は戦争中の仕事がなかった時に『日本庭園発達史』を一生懸命読んでぼろぼろになったと述べている。

注34) 森 1945 『平安時代庭園の研究』桑名文星堂のことでありと考えられる。

注35) 堀口の『庭と空間構成の伝統』に対する西澤の書評は『国際建築』1965年9月号に掲載されている。

注36) この文章の初出は日本建築協会の機関誌『建築と社会』1976年8月号である。

注37) 西澤は森の実測図や著作の他に、重森三玲『日本庭園史図鑑』も参考にしているが、金澤によると「この図も西澤はベースの図面として利用したが、庭のみの図で建物や周辺が抜けているために参考図に留まっている」(金澤 2006 p.39)としている。

注38) たとえば、森 1969 巻末の大徳寺大仙院・妙喜庵露地・大徳寺孤篷庵の実測図には樹木が描き込んであり、葉張りの大きさや樹種の違いなどもある程度表現されており、森が樹木の存在を輕視しているわけではないことがわかる。それでも、西澤の実測図に比べるとまだ記号的な表現である。

参考文献

- 稲垣栄三他監修 1996 『堀口捨己の「日本」 空間構成による美の世界』 建築文化8月号別冊 彰国社 平成8年
上原敬二 1983 『この目で見た造園発達史』 「この目で見た造園発達史」刊行会 昭和58年

- 岡崎文彬 1940 『日本庭園』 弘文堂書房 昭和15年
- 古宇田實 1933 『建築学会パンフレット第3集第13号 建築と関係深き庭園』 日本建築学会 昭和8年
- 新建築社 1999 『坂倉建築研究所 アソシエイツのかたち』 新建築社編集・発行 新建築1999年9月臨時増刊号
- 西澤文隆 1974 『西澤文隆小論集1 コートハウス論』 相模書房 昭和49年
- 西澤文隆 1975 『西澤文隆小論集2 庭園論Ⅰ』 相模書房 昭和50年
- 西澤文隆 1976a 『西澤文隆小論集3 庭園論Ⅱ』 相模書房 昭和51年
- 西澤文隆 1976b 『西澤文隆小論集4 庭園論Ⅲ』 相模書房 昭和51年
- 西澤文隆 1981 『建築 NOTE 西澤文隆 伝統の合理主義』 丸善 昭和56年
- 西澤文隆他 1987 『西澤文隆のディテール 自然と共棲する術』 西澤文隆・金澤良春 彰国社 昭和62年
- 西澤文隆 1988a 『西澤文隆の仕事(一) 透ける』 鹿島出版会 昭和63年
- 西澤文隆 1988b 『西澤文隆の仕事(二) すまう』 鹿島出版会 昭和63年
- 西澤文隆 1988c 『西澤文隆の仕事(三) つくる』 鹿島出版会 昭和63年
- 西澤文隆「実測図」集刊行委員会 1997 『建築と庭 西澤文隆「実測図」集』 建築資料研究社 平成9年
- 西澤文隆実測図集刊行会 2006 『日本の建築と庭 西澤文隆実測図集 解説編』 中央公論美術出版 平成18年
- 堀口捨己 1948 『草庭 建物と茶の湯の研究』 白日書院 昭和23年 ※1968(昭和43)年 筑摩書房より筑摩叢書107として再版
- 堀口捨己 1949 『利休の茶室』 岩波書店 昭和24年
- 堀口捨己 1951 『利休の茶』 岩波書店 昭和26年
- 堀口捨己 1952 『桂離宮』 毎日新聞社 昭和27年
- 堀口捨己 1965 『庭と空間構成の伝統』 鹿島研究所出版会 昭和40年
- 堀口捨己 1973a 『堀口捨己作品 家と庭の空間構成』 鹿島研究所出版会 昭和48年
- 堀口捨己 1973b 『茶室』 日本の美術 No.83 文化庁他監修 至文堂 昭和48年
- 森蘊 1944 『日本庭園の伝統』日本の美と教養(9) 一條書房 昭和19年
- 森蘊 1945 『平安時代庭園の研究』 桑名文星堂 昭和20年
- 森蘊他 1949 『日本の住居のうつりかわり』 こどものための文化史 国立博物館編 大岡實・森蘊・小林文夫著 童話秋春社 昭和24年
- 森蘊他 1950 『衣食住の話』 学級文庫 上級用6 社会科 森蘊・山辺知行著 社会教育連合会 昭和25年
- 森蘊 1950a 『家のはなし』 小学生文庫(12) 森蘊著・指導 中村正典繪 小峰書店 昭和25年
- 森蘊 1950b 『日本の庭園』 河原書店 昭和25年
- 森蘊 1950c 『美しい庭園 一鑑賞と造園一』 創元選書197 創元社 昭和25年
- 森蘊 1951 『生活の歴史』 ほくたちの研究室 さ・え・ら書房 昭和26年
- 森蘊 1954 『修学院離宮の復原的研究』 奈良国立文化財研究所学報第二冊 養徳社 昭和34年
- 森蘊 1955 『修学院離宮』 創元社 昭和30年
- 森蘊 1956 『新版 桂離宮』 創元社 昭和31年
- 森蘊 1957 『日本の庭園』 創元選書259 創元社 昭和32年
- 森蘊 1959 『中世庭園文化史』 奈良国立文化財研究所学報第六冊 昭和34年
- 森蘊他 1960 『日本の庭』 森蘊著 恒成一訓(写真) 朝日新聞社 昭和35年
- 森蘊 1962 『寝殿造系庭園の立地的考察』 奈良国立文化財研究所十周年記念学報第十三冊 昭和37年

- 森蘊 1967 『小堀遠州』 人物叢書 吉川弘文館 昭和42年
森蘊 1969 『庭園とその建物』 日本の美術 2 No.34 文化庁他監修 至文堂 昭和44年
森蘊 1971 『奈良を測る』 学生社 昭和46年
森蘊 1973 『庭ひとすじ』 学生社 昭和48年
森蘊 1975 『修学院離宮』 日本の美術 No.112 文化庁他監修 至文堂 昭和50年
森蘊 1981 『日本庭園史話』 NHK ブックスカラー版 日本放送出版協会 昭和56年
森蘊 1984 『庭園』 日本史小百科19 近藤出版社 昭和59年
森蘊門下生一同 1989 『故森蘊先生著述作品目録(稿)』 自家版 平成元年
横井時冬 1940 『日本庭園発達史』 日本文化名著選 校註：堀口捨己・森蘊 創元社 昭和15年

参考論文

- 金澤良春 2006 「両界曼陀羅 —「設計と実測」あるいは「坂倉準三と西澤文隆」—」『日本の建築と庭
西澤文隆実測図集 解説編』 西澤文隆実測図集刊行会 中央公論美術出版 平成18年 pp.36-47
田中栄治 2005 「雑誌『新建築』にみる戦後の阪神間の住宅 —阪神間のモダニズム住宅 その1—」
『神戸山手大学紀要』 第7号 pp.47-58 2005.12.20
田中栄治 2006 「雑誌『建築と社会』にみる戦前の関西の住宅 —阪神間のモダニズム住宅 その2—」
『神戸山手大学紀要』 第8号 pp.105-118 2006.12.20
田中栄治 2007 「雑誌『住宅研究』にみる大正期関西の住宅 —阪神間のモダニズム住宅 その3—」
『神戸山手大学紀要』 第9号 pp.97-108 2007.12.20
田中栄治 2009 「雑誌『新建築』にみる大正から昭和初期の関西の住宅 —阪神間のモダニズム住宅
その4—」『神戸山手大学紀要』 第11号 pp.61-72 2009.12.20
田中栄治 2012 「大正後期から昭和初期の関西の住宅における庭園の役割 —阪神間のモダニズム住宅
その5—」『神戸山手大学紀要』 第14号 pp.33-55 2012.12.20
田中栄治 2013 「大正後期の住宅における庭園の役割 —大屋霊城『庭本位の小住宅』より—」『神戸山
手大学紀要』 第15号 pp.29-46 2013.12.20
田中栄治 2014 「昭和初期の住宅における建築と庭園 —西川友孝『造庭建築』を中心に—」『神戸山手
大学紀要』 第16号 pp.19-36 2014.12.20
西澤文隆 1978a 「庭への履歴書」『庭』 第39号 1978(昭和53)年4月号 建築資料研究所 pp.74-79
西澤文隆 1978b 「私の感銘の受けた図書」『建築雑誌』 Vol.93 No.1142 昭和53年10月号 日本建築
学会 p.7
西澤文隆 1983 「数寄屋論 —堀口捨己・村野藤吾・吉田五十八の建築と庭をみて—」『現代の建築家
堀口捨己』 pp.156-163 鹿島出版会 昭和58年
堀口捨己 1935 「庭先と中庭」『今日の住宅 その健康性と能率化への写真と解説』 アサヒグラフ 東
京朝日新聞 昭和10年
堀口捨己 1943 「洛中洛外屏風の建築的研究」『畫論』 第十八號 1943(昭和18)年2月 pp.2-40
前田松韻 1927a 「寝殿造りの考究(一)」『建築雑誌』 vol.41 No.491 1927(昭和2)年1月号 pp.
1-38
前田松韻 1927b 「寝殿造りの考究(二)」『建築雑誌』 vol.41 No.492 1927(昭和2)年2月号 pp.
105-141
森蘊 1938 「鳥羽殿庭園考」『造園雑誌』 第5巻第2号 1938(昭和13)年7月号 pp.90-102
森蘊 1983 「建築と庭園の結びつきを求めて」『建築雑誌』 vol.98 No.1211 1983(昭和58)年9月号
p.20